現代存在論講義

Lectures on Contemporary Ontology

倉田剛
Kurata Tsuyoshi

ファンダメンタルズ
Fundamentals

哲学の根幹たる
“存在論”への招待

論理学を武器としてきわめて明晰な議論へと新生した存在論——
その最先端まで学生と教員の対話を織り交ぜた解説で導く本格入門書。
存在論の方法、カテゴリーの体系、性質について初歩から詳論する。

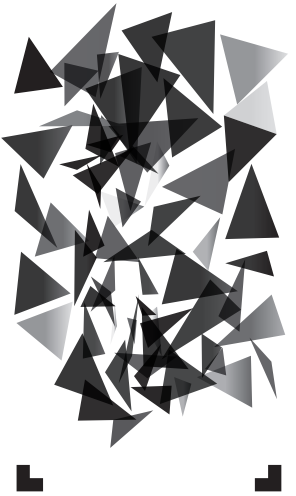
新曜社

現代存在論講義

Lectures on Contemporary Ontology

倉田剛
Kurata Tsuyoshi

ファンダメンタルズ
Fundamentals



新曜社

序　文

本書の成立とスタイル

私が「現代存在論についての入門書を書く」という構想に向かって、最初の一歩を踏み出したのは、今から 8 年ほど前のことである。私は「研究ノート」というかたちで、当時勤務していた大学の紀要にいくつかの雑文を発表した[1]。地方の小さな大学の紀要に掲載される研究ノートなど誰の目に触れることもないだろうと大いに油断していたが、インターネットが発達した社会では、どんな雑文でも一定数の読者を獲得するものである。学会などで大学院時代の後輩や関心を同じくする研究者仲間と顔を合わせるたびに、半ば冗談交じりにひやかされ、半ば本気で叱咤激励された。彼らの中には講義の参考資料として私の研究ノートを使ってくれた奇特な人もいたようである。しかしその後、諸々の事情から（これは私の怠惰な性分を隠すための言い訳にすぎないが）、草稿の執筆はストップしてしまった。一時期は出版をほぼ諦めていたが、どうしたことか一昨年あたりから再び私の中に出版に対する意欲が湧いてきた。これを機に当初の構想を少しだけ拡大し、入門書のレベルでは通常扱わないようなトピックスを付け加えて一気にまとめ上げることにした。こうして出来上がったのがこの『現代存在論講義 I』（およびその続編『現代存在論講義 II』）である。

本書は、基本的には、哲学に多少なりとも関心をもつ大学生や一般読者を念頭に書かれたものではあるが、哲学を専門とする大学院生が読んだとしても、それなりの発見はあるだろう。また専門の研究者にとっては、持ち合わせている知識を整理する機会になるだろうし、「もっと良い存在論入門を書いてやろう」というリアクションを喚起するものとなるかもしれない。当然、私としては後者の反応も期待している。その意味で、私はあらかじめ「読者層」なるものを絞り込むことはしなかった。読者それぞれの関心と理解度に応じた楽しみ方をしてもらえれば幸いである。

---

［1］ 倉田剛「『現代存在論入門』のためのスケッチ：第一部」、九州国際大学紀要『教養研究』第16巻第1号、2009年、119–171頁；「『現代存在論入門』のためのスケッチ：第二部」、九州国際大学紀要『教養研究』第16巻第2号、2009年、123–164頁；「『現代存在論入門』のためのスケッチ：第三部」、九州国際大学紀要『教養研究』第16巻第3号、2010年、157–181頁。

もちろんそうは言っても、私は初学者にとって理解しにくいと思われる議論に関して、つねに分かりやすい説明を心がけた。記述文に時おり「対話文」が織り交ぜられているのはそのためである。プラトンの著作を引き合いに出して、対話という手法が由緒正しきものであると主張するつもりは毛頭ないが（プラトンの対話篇は一級の文学作品でもある）、講義の臨場感を伝えることや、適当な「間」を設けることで論点の再確認を促すことは、時には難しく見える議論の理解を手助けしてくれるに違いない。

登場人物は、ユイとミノルの二人である。「地の文」を担当する僕（＝先生）を含めると「三人」とカウントすることもできよう。二人の受講者しかいない授業は非現実的だと思われるかもしれないが、現在私が勤務する大学では、そうした牧歌的な授業がなお存在する。（こうした「古き良き大学」がいつまで存続できるのかは分からないが。）ここで二人の登場人物を簡単に紹介しておきたい。ミノルは素朴な直観を大切にし、思いついたことをすぐ口にしてしまう学生である。やや軽率ではあるが、それにもかかわらず（あるいは、それがゆえに）、ときには鋭い問いを投げかけたり、興味深い指摘をしたりする。一方、やや古風な「お嬢様言葉」を話すユイは懐疑的で抑制のきいた知性の持ち主である。しばしば彼女はミノル（や僕）の奔放さに歯止めをかける役割を演じる。また、ミノルは「実在論者」に共感を抱く学生であるのに対し、ユイはどちらかと言えば「唯名論者」の側に立つことが多い。二人の発言はともに私の「内なる声」でもある。それらは私が物事を考えるときに、つねにせめぎ合う二つの声である。

本書の主題

本書の主題は「現代存在論」である。この分野はやや複雑な歴史的背景をもつが、さしあたりそれを「分析存在論」（analytic ontology）とほぼ同じ意味で解することにしよう。分析存在論は、分析哲学の中でも現在最も勢いがある「分析形而上学」の一分野である。哲学史に通じた人であれば、「分析哲学」と「形而上学・存在論」という言葉の組み合わせに驚くかもしれない。たしかに 20 世紀前半の分析哲学が、「論理実証主義」と「言語論的転回」の影響のもと、形而上学を不確かで疑わしい学問として断罪したことはよく知られている。しかしながら、1970 年代の終わりから 80 年代の初めにかけて、論理実証主義と言語論的転回の正当性に疑問を投げかける哲学者たちが登場し始める。形而上学的・存在論的探求が再び息を吹き返すようになったのは、主にそうした哲学者たち――アームストロング（D. M. Armstrong）、ルイス（D. Lewis）、ラックス（M. J. Loux）、ヴァン・

インワーゲン（P. van Inwagen）など――の尽力による。このあたりの歴史的経緯については、すでに日本でもお馴染みのものとなりつつあるが、さらに詳細な検討も必要であろう。なぜなら現代の形而上学復興には、「現象学派」――ブレンターノ（F. Brentano）、フッサール（E. Husserl）、マイノング（A. Meinong）、インガルデン（R. Ingarden）など――に関する哲学史研究も少なからぬ寄与をなしているからである。本書がスミス（B. Smith）やサイモンズ（P. Simons）といった（ややマイナーな）哲学者たちの論文を参照するのはそのためである。したがって本書のもう一つの背景は現象学にあると言えなくもない。だがそれはさておき、分析哲学の反形而上学的傾向がもはや過去の遺物と化していること自体は疑いえない。このことは今日、分析形而上学が、「言語哲学」、「心の哲学」、「知識の哲学」などと並んで、分析哲学のうちに確たるポジションを得ている事実からも明らかである。

分析形而上学が論じるトピックスは極めて多岐にわたる。だが本書は、それらの中でも存在論に直接的に関わるトピックスのみを扱う。大雑把に言えば、それらは「世界には何が存在するのか」、「世界はどのようなカテゴリー的構造をもつのか」といった問いと直接的に結びついたトピックスを指す。たとえば「普遍者と個別者」、「トロープ」、「物質的対象」、「事態」、「可能世界」、「虚構的対象」などは典型的な存在論的トピックスである。明確な線引きは難しいとはいえ、「自由意志」、「人格の同一性」、「因果」、「時間と空間」、「神」などのトピックスは、形而上学的ではあっても、とくに存在論的ではないという理由により、独立した主題として扱っていない。

本書を世に問う理由――なぜ『現在論在論講義』なのか

なぜこの本を世に問う必要があるのか。私が本書を執筆した理由について簡単に述べておきたい。第一の理由はしごく単純である。それは日本語で書かれた存在論についての手頃な著作がなかったからである。この状況は、私が本書を構想した時点から多少なりとも変化した。やや手前味噌になるが、その変化の一つは2014年に出版された『ワードマップ現代形而上学』によって生じたと言えよう[2]。だがその入門書は広く現代形而上学を紹介するものであり、存在論に特化したものではない。しだいに私は『ワードマップ現代形而上学』で十分に扱うことのできなかった存在論的トピックスをまとめて、それを補完する必要があると考える

[2]　鈴木生郎・秋葉剛史・谷川卓・倉田剛『ワードマップ現代形而上学』、新曜社、2014年

ようになった。これが第一の理由である。

第二の理由は、わが国で流布する存在論についての通念を打破したいからである。わが国では「存在論」と聞くと、直ちにハイデガー（M. Heidegger）を連想する人が多い。（むろんこれは哲学をある程度知っている人たちの反応である。）私自身は、ハイデガーを高く評価し、学生時代から人並みに彼の著作を読んできたつもりである。しかし、「存在論→ハイデガー哲学」という連想はやや安直なものだと思う。彼の「基礎的存在論」（現存在の分析）あるいは「存在に関する後期思想」は、存在論の歴史から見ればかなり特殊である。私は、ハイデガーとはまったく異なる仕方で、伝統的な存在論（形而上学）と向き合えることを本書の中で示したい。

第三の理由は、存在論こそが最良の「哲学入門」の役割を果たすと確信するからである。存在論は哲学の根幹となる分野である。そこには、「対象」、「性質」、「関係」、「種」、「存在」、「同一性」、「抽象」、「具体」、「可能性」、「必然性」、「例化」、「部分」、「依存」、「実在論」、「唯名論」といった哲学の根本諸概念が登場する。これらの諸概念を理解することを通して、初学者は哲学がいったい何を問題としてきたのか（あるいは問題としているのか）を最も純粋な仕方で知ることができる。また、哲学に属する他の諸分野（言語哲学や心の哲学）は存在論的な基礎概念を暗黙の裡に用いているので、それらの諸概念を理解することは隣接する諸分野の十全な理解につながるはずである。

最後に、存在論は哲学と他の諸学問を結ぶ接点になりうるからだという理由を挙げておきたい。近年、存在論が知識工学や情報科学によって盛んに応用されていることは、一般の読者のみならず、哲学を専門とする研究者たちのあいだでさえもあまり知られていない。（ためしに片仮名表記の「オントロジー」（存在論）をインターネットで検索してみると、哲学以外の学問で研究されている「存在論」関連の文献を数多く発見するであろう。いまや「存在論」は哲学者たちの専売特許ではない！）本書はこうした「オントロジー」あるいは「応用存在論」を主題的に扱うものではないが、存在論という分野には、ともすれば孤立してしまいがちな哲学という知的営為をその「外」に向かって開く可能性があることを知ってほしい。これが本書を世に問う第四の理由である。

著者の立場——暗黙の前提

著者自身の「立ち位置」について一言述べておこう。本書は私の哲学的立場を前面に押し出したものではない。とはいえ、あらゆる問題について「中立」を装

うことは極めて難しく、時には欺瞞的ですらある。最近よく「報道の中立性が守られていない」とか、「あれは偏向報道だ」といった言葉を耳にするが、それらは自分が受け入れたくない意見を批判するための方便であることが多い。完全に中立的な報道は困難である。同様のことが哲学の議論についても言える。ただしジャーナリズムとは違い、哲学は、自らの依って立つ明示的／暗黙の諸前提をできる限り明らかにしなければならない。だが実を言えば、これは「言うは易く行うは難し」の典型である。明示的な諸前提については、本書の中で検討されることになる。たとえば私がシンパシーを感じる「実在論」の立場はそうした前提の一つである。しかしながら、私が正しいと考える暗黙の諸前提に関しては、それらを詳らかにすることは容易でない。というのも、それらは私の精神の深層部にあって、私の判断や選択に影響を与えているからである。こう述べると、何か「ミステリアス」なものであるように感じられるかもしれないが、そうではない。それらの諸前提は、哲学の個々の論証の中では見えにくく、正当化の対象にもなりにくいというだけの話である。それらは宗教的な意味での「信仰」などとは異なり、理性的な検証を拒むものではなく、時には訂正されうるものでもある。

そうした諸前提の中でもとくに大きな影響を与えていると思われるのは、「哲学には固有の問いと方法および説明方式がある」という私の信念である。これは近年、分析哲学の内部でも支配的な立場になりつつある「自然主義」とは相容れない態度である。この自然主義の最もラディカルかつユニークなマニフェストは戸田山和久氏の『哲学入門』に見ることができる[3]。戸田山氏によれば、自然主義とは「科学的知見と科学的方法とを使いながら哲学し、また、哲学説も科学的知見によって反証されることを認める立場、言い換えれば、科学の一部として哲学をやろうぜという立場」(34頁) を指す。戸田山氏の説く自然主義はとにかく痛快であり、人を魅了する力をもつ。できればこれと正面から衝突することは避けたいと思わせるほどの迫力もある。しかしながら、どうしても私は自然主義を受け入れる気にはなれないのである。とりわけ「方法論的自然主義」(哲学と自然科学は同じ方法と目的をもつ) の立場に立つ哲学者たちは、それを「アーム・チェア」に腰掛けながら（あるいはパソコンと書棚しかない研究室から）唱える限りにおいて、「自家撞着」の誹りを免れないように見える。平たく言えば、「言っていること」と「やっていること」が違うじゃないかという話である。(これに対して、「存在論的自然主義」――いわゆる「超自然的なもの」や、時空間に位置をもたな

[3] 戸田山和久『哲学入門』、ちくま新書、2014年

い、ないし因果的効力をもたない「抽象的なもの」の存在を認めない立場――は、そうした自己矛盾を含むものではなく、それに賛同するか否かは別として、十分に理解できる。）

とはいえ、現時点で私は、「哲学には固有の問いと方法および説明方式がある」という信念を正当化しうる決定的な論証をもちあわせておらず、また自然主義を論駁するのに十分な論証を提示することもできない。だが、この信念について若干の言葉を補足しておくことはできるだろう。

哲学の歴史において、哲学に固有の方法を否定しようとする立場は幾度となく現れてきた。たとえば19世紀の後半に流行した「心理主義」（psycholosism）がそうである。狭義の心理主義とは、数学および論理学の法則はすべて心理法則に還元できると説く立場を指すが、広い意味でその矛先は哲学的方法にも向けられていた。こうした心理主義に対して、フレーゲ（G. Frege）とフッサールという現代哲学の二人の祖が猛烈に反発したことはよく知られている。その後、心理主義はどのような運命を辿ったであろうか。現在、少なくとも哲学や論理学の領域において、「心理主義者」を自認する者はほとんどいないように見える。（もちろんクワイン（W. V. O. Quine）による「認識論の自然化」のプログラムを忘れてはならないが、これは「認識論」と呼ばれる一分野の「心理学化」にすぎない。）ある意味で、哲学は心理主義からの攻撃に耐えて「生き延びた」と言えよう。あるいは、もう少し実情に即した言い方をすれば、哲学はそれまで傘下に収めてきたいくつかの分野を経験科学に身売りすることによって、かろうじて「本業」を守ったのである。（これはファンドなどに買収されかかった老舗企業がやることに少し似ている。）現在、自然主義を標榜する哲学者たちのほとんどは、この「生き延びた哲学」の遺産に多くを負っていることを自覚しなければならない。

やや話が逸れるかもしれないが、当時、心理主義者と反心理主義者とのあいだの論争は、大学内の学科間の争いと見なされることがあった。つまり反心理主義者たちは自分たちの領域を死守するために（有り体に言えば、自分たちのポストを守るために）、心理主義に反対していると捉えられもした。これを現在の状況と重ね合せることもできるだろう。「哲学には固有の問題と方法がある」などと唱える者は、たんに自分たちの首が切られることを恐れて、そのようなことを主張しているにすぎない、と。たしかにこれは「お話」としては面白いが、かなり皮相な見方であると言わざるをえない。それはともかく、ここで私が強調したいのは、哲学はその危機を迎えるたびに、問いを先鋭化させ、論証を精緻化し、方法論の見直しを行ってきたということである。（これが行き過ぎると、職業哲学者に

しか理解できないような「哲学」が出来上がるというジレンマがある。）ゆえに自然主義からの挑戦は、たとえそれが結果的には哲学の「縮小再生産」を促すとしても、哲学的探求のコアを見つめ直す機会になると捉えた方がよい。そのコアの一つが、本書で論じる「存在」や「実在性（リアリティー）」に関わる形而上学的・存在論的問題に他ならない。（もう一つのコアは「価値」や「生き方」に関わる道徳的・倫理的問題であろう。）

私は、哲学が幾多の危機を乗り越えてきたので、今後もそうやって生き延びていくだろうと楽観しているわけではなく、また哲学的探求は諸科学とは無関係になされうると述べているわけでもない。私も、他の人々と同様に、哲学が生き残るための方策を真剣に模索すべきだと考えている。たしかにそうした方策の一つは「哲学の自然化」であるかもしれない。しかし私にはそれが現実的な方策であるようには見えない。なぜなら、すでに示唆したように、自然科学の最新の成果にもとづいて哲学することと、自然科学の研究に実際に従事することは根本的に異なる二つの知的営為であるからだ。哲学は経験諸科学に敬意を払いながらも、それらとは一線を画す概念的探求に専念すべきである。これが本書の諸講義に通底する「暗黙の前提」である。所詮は「思弁」であることを認め、されど「思弁」がもつ可能性を最大限に引き出すこと。これは哲学に残された（「唯一の」とは言わないまでも）一つの現実的な道である。

哲学者が科学者の真似事をするのは、チック・コリアがバッハを弾くようなものである。それはそれで微笑ましいが、われわれが聴きたいのは彼のヘタクソなバッハではなく、彼の躍動するジャズである。逆に、クラシックの音楽家がジャズを演奏することもあるが、往々にしてそれはカッコ悪く、聴けた代物ではない。それでもクラシックとジャズは互いにリスペクトしあい、それぞれの独立性を保ちながらも、時おり生産的な交流を行うこともある。これはあくまでも比喩にすぎないが、科学と哲学との関係についてある見方を提供してくれる。哲学が科学の成果を一刀両断することができないのと同様、科学の側も哲学的議論を容易に一蹴できると考えてはならない。両者は「固有の方法と説明方式」をもつからである。それを完全に無視することは、クラシックのピアニストが、ジャズピアニストに向かって「あなたの演奏法は誤っている」と述べるようなものである。

いずれにせよ、ここで述べた暗黙の前提（私の信念）は、それ自体論証の対象ではなく、むしろ本書全体を動機づけるものである。哲学者はどんな領域に関しても何事かを言いうると過信してはならない。さりとて無理をして科学者の仲間であるふりをする必要はないし、ましてや大袈裟な身振りを交えて自らの「死」

を宣言する必要などない。著者のこうした態度が説得力をもつか否かは、最終的には本書を通読した読者によって判断されるべき事柄であろう。本書を読み進める際に、このことを頭の片隅に置いて頂ければ幸いである。

目　次

序　文　i
本書の成立とスタイル　i
本書の主題　ii
本書を世に問う理由――なぜ『現代存在論講義』なのか
iii著者の立場――暗黙の前提　iv

第一講義　イントロダクション――存在論とは何か　1

1　何が存在するのか　1
1.1　「何が存在するのか」から「どのような種類のものが存在するのか」へ　1
1.2　性質と関係　2
1.3　物とプロセス　5
1.4　部分と集まり　6
1.5　種という普遍者　10
1.6　可能的対象および虚構的対象　12
2　存在論の諸区分　16
2.1　領域的存在論と形式的存在論　16
2.2　応用存在論と哲学的存在論　18
Box 1　表象的人工物としての存在論――存在論の可能な定義　22
2.3　形式的存在論と形式化された存在論　23
2.4　存在論の道具としての論理学　25
Box 2　同値、分析あるいは存在論的説明について　30
2.5　存在論とメタ存在論　32
まとめ　33

第二講義　方法論あるいはメタ存在論について　35

1　存在論的コミットメントとその周辺　35
1.1　世界についての語りと思考　35
1.2　存在論的コミットメントの基準　39
Box 3　すべてのものが存在する ?! ――存在の一義性について　43
1.3　パラフレーズ　44
Box 4　“No entity without identity”――クワイン的メタ存在論の否定的テーゼ　49

2　理論的美徳――「適切な存在論」の基準について　51
2.1　単純性　52
2.2　説明力　58
2.3　直観および他の諸理論との整合性　60
3　非クワイン的なメタ存在論　62
3.1　虚構主義　63
3.2　マイノング主義　65
3.3　新カルナップ主義　69
Box 5　カルナップと存在論　75
まとめ　79

第三講義　カテゴリーの体系――形式的因子と形式的関係　81

1　カテゴリーと形式的因子　81
1.1　カテゴリーの個別化――形式的因子　81
1.2　存在論的スクエア　84
2　形式的関係　89
2.1　４カテゴリー存在論における形式的関係　89
2.2　存在論的セクステットと形式的関係　95
Table 1　主要な形式的関係のまとめ　98
まとめ　99

第四講義　性質に関する実在論　101

1　ものが性質をもつということ　101
1.1　何が問われているのか　101
1.2　存在論的説明あるいは分析について　103
1.3　実在論による説明　105
2　実在論の擁護　109
2.1　分類の基礎　109
2.2　日常的な言語使用　111
2.3　自然法則と性質　115
3　ミニマルな実在論　117
3.1　述語と性質　118
3.2　否定的性質　121

3.3　選言的性質　125
3.4　連言的性質と構造的性質　127
3.5　付録：高階の普遍者について　131
Box 6　アームストロングへの疑問　136

まとめ　137

第五講義　唯名論への応答　139

1　クラス唯名論　139
1.1　クラスによる説明　139
1.2　例化されていない性質および共外延的性質の問題　141
1.3　クラスの同一性基準と性質　145
1.4　すべてのクラスは性質に対応するのか　145

2　類似性唯名論　147
2.1　類似性の哲学　147
2.2　類似性唯名論への反論　150

3　述語唯名論　152
3.1　正統派の唯名論　152
3.2　述語唯名論への反論　153

4　トロープ唯名論　154
4.1　実在論の代替理論としてのトロープ理論　154
4.2　トロープの主要な特性とそれにもとづく「構築」　156
4.3　トロープ唯名論のテーゼとそれへの反論　159
Box 7　トロープへのコミットメントを動機づける理由　161
4.4　実在論との共存　163

まとめ　165

結語にかえて——存在の問いはトリヴァルに解決されるのか？　167

読書案内　177

あとがき　181

索引　183

装幀——荒川伸生

第一講義

イントロダクション
――存在論とは何か

この第一講義の主なねらいは、存在論という学問についての大まかなイメージを提供することにある。講義の前半では、存在論の典型的なトピックスを挙げ、そこで問われている事柄を分かりやすく解説する。例として挙げられるのは「カテゴリー」、「性質と関係」、「物とプロセス」、「部分と集まり」、「可能世界」、「虚構的対象」といったトピックスである。講義の後半では、存在論の諸区分に関する考察を通じて、この学問についてのイメージをさらに鮮明にすることを目指す。

1　何が存在するのか

1.1　「何が存在するのか」から「どのような種類のものが存在するのか」へ

「世界にはいったい何が存在するのか」。これが存在論の最初の問いであり、究極の問いでもある。途方もないことを問うているように見えるが、まずはウォーミングアップも兼ねて「この教室には何が存在するのか」という問いを考えてみよう。

ミノル　この教室に何が存在してるのかって？　えーっと、先生がいて、ユイちゃんがいて、僕もいて……。前に大きな黒板があって、後ろに小さな黒板があって、僕が座っている椅子があって、ユイちゃんが頬杖をついている机があって、先生が手にしているチョークがあって……。

ユイ　まったく要領が悪いわね。そんなものいちいち挙げていたらきりがないでしょ。人がいて、黒板や椅子や机やチョークもある、と言えばいいじゃない。もっと簡単に言えば、人と物が存在するということになるわね。この教室に存在するものをすべて言い尽したわよ。

存在論へのファースト・ステップとしては悪くないやりとりである。ここには文字通りの「何が存在するのか」という問題から、「どのような種類のものが存在するのか」という問題への移行が見られる。存在論者は「何が存在するのか」という問いに対して、あれやこれやのものを枚挙するという答え方を求めているわけではない。もしそうであれば、われわれは存在するものの途方もないリストを作成しなければならないだろう。存在論者は、そうしたリストではなく、あれやこれやのものが属する種類のリストを作ろうとしているのだ。こうした種ないし類は「**カテゴリー**」（categories）と呼ばれる。

カテゴリーのレベル分けとそれに対応する存在論の区分についての話は、この第一講義の後半で行うことにしよう。また、カテゴリーに関するさらに立ち入った話題は第三講義の中で論じることにしたい。

1.2　性質と関係

さしあたり「人」というカテゴリーに属するものが存在し、「物」というカテゴリーに属するものが存在する。このことはもっともらしい。しかしこの教室に存在するものは果たしてそれだけだろうか。

ミノル　この教室には白いチョークが存在し、白い紙が存在し、白いシャツを着た人が存在する。だから白さも存在するんじゃないかな。同じように、四角い黒板が存在し、四角い机が存在し、四角いノートも存在するから、四角さも存在する。つまり、個々の白いものが共有する白いという性質や、個々の四角いものが共有する四角いという性質が存在するってことだよ。これって何だか哲学っぽい。まあ、そうした性質がこの教室という空間の中に存在するかどうかは分からないけれど。

ユイ　私には「悪しき哲学」って感じがするわ。そんなふうに考えていけば、私もミノル君も学生だから、学生であるという性質が存在することにならない？　個々の学生であれば、握手をしたり、蹴飛ばしたりできるけど、どうやって学生であるという性質と握手したりそれを蹴飛ばしたりできるわけ？　同様に、このボールペンは日本製で、このペンケースも日本製だから、それらが共有するメイド・イン・ジャパンであるという性質が存在するって言いたいわけ？　でも実際、目の前に見えているものは、このボールペンとペンケースだけであって、メイド・イン・ジャパン性なんてものはどこにも見えてないわけでしょ。たしかに製品に印字されてある“MADE IN JAPAN”という文字は見えているけれど、それはインクの染みに

過ぎないわけで……。とにかく、私やミノル君に加えて学生性が存在する、あるいはこのボールペンやペンケースに加えて、メイド・イン・ジャパン性が存在すると説く立場はしっくりこないわ。存在するものは個々のものだけで十分だと思う。

早くもミニチュア版「**普遍論争**」（Problem of Universals）が生じようとしている。普遍論争は存在論の歴史の中でもっとも由緒正しき論争として知られる。そこでは、ユイさんやミノル君といった「人」、このチョークやあのペンケースといった「物」、より正確には具体的な「**個別者**」（particulars）たちに加えて、それらが共有する**性質**（properties）、すなわち「**普遍者**」（universals）が存在するか否かが最大の争点となる。よく知られているように、普遍者の存在を認める立場は「**実在論**」（realism）、それを否定し個別者のみが存在すると説く立場は「**唯名論**」（nominalism）と呼ばれる。

ユイ　その「フヘンシャ」っていったい何なの？　いかにも哲学らしい大仰な響きがするけど。

普遍者についての詳細は第四講義で検討することになるので、ここではごく大雑把な仕方で説明しておこう。普遍者というのは、個々のものが共有しうる同一の何かであり、反復可能な何かだとされる。たとえばユイさんのノートとミノル君のノートといった個別者は、同一のノート性という普遍者を共有している。個別者としてのノートは燃やされて灰になってしまえば、この世界に再び出現することができないのに対し、普遍者としてのノート性は燃やすことができないばかりか、新たに製造される個々のノートのうちに同一のものとして反復される。

ミノル　個々のノートを眺めたり、それに触れたりすることはできるけど、ノート性そのものを見たり、ノート性にメモを取ったりすることはできない。そもそも物質的なものではないから、ノート性を燃やすことなんてできっこないよね。

ユイ　つまり、普遍者としてのノート性は非物質的対象ということになるわね。でも、真面目な学問がそんな対象の存在をめぐって議論するなんて。存在論者は幽霊の研究でもするつもり？

そうではない。存在論者はいわゆる**抽象的対象**（abstract objects）の存在には

興味をもっていても、幽霊の存在にはほとんど何の関心も抱かない。一般的に「抽象的対象」とは時空間のうちに位置をもたない対象だとされるが、ここでは少なくとも空間のうちに位置をもたない対象として理解しておこう[1]。数や命題（「ピュタゴラスの定理」など）と同様に、普遍者もまた抽象的対象の一種だと考えられる。ところが幽霊は、もしそれが存在するとしても、抽象的対象ではない。というのも、幽霊はその姿や声が時おり観察できるものとして理解されるからである。

ミノル　心霊写真に背後霊が映っていたとか、悪霊の声が聴こえたとか、そんな言い方をする人がいるもんね。でも、たしかにそうした意味で幽霊は時空間の中に位置をもつ**具体的対象**（concrete objects）として捉えられている。

だから「非物質的」だからといって、普遍者の話と幽霊の話を一緒くたにすることはできない。もし幽霊の存在について議論したいのであれば、それは存在論者にではなく、むしろ物理学者に任せた方がよかろう。もちろん「観察された（と称される）データ」にそもそもの不備があるので、結局はそんなものは存在しないということになるだろうが[2]。

思わぬ方向に話が逸れてしまった。話を普遍者に戻すと、現代の実在論者たちの多くは、性質に加え、**関係**（relations）もまた普遍者であると考える。たとえばノートが机の上にあり、チョークが教卓の上にあるという事態（事実）が共に成立しているとしよう。彼らによれば、それらの事態は○○は××の上にあるという関係を共通項としてもつ。また、黒板と教卓とのあいだには 1 メートルの間隔があり、ミノル君とユイさんもまた 1 メートル離れて座っているとしよう。ここにも○○と××は 1 メートル離れているという共通の関係が存在するように思われる。実在論者たちは、こうした関係が他の様々な個別者たちのあいだにも反復

---

[1]　この種の規定を採用するのは「時間のうちに位置をもつ抽象的対象」の可能性を確保したいからである。こうしたものの中には、理論や法や音楽作品なども含まれる。それらはある時点で創造されたという意味で時間的起源を有するが、空間内に特定の位置をもつようには見えない。

[2]　とはいえ、次の二つの点を補足しておきたい。第一に、「非物質的ではあるが、具体的である対象」という概念自体はそれほど奇妙なものではない。たとえば、影や境界がそうした対象であると主張することは可能である。なぜなら、それらは空間内に位置をもつが物質的であるようには見えないからだ。第二に、神話や小説に現れる特定のキャラクターとしての「幽霊」は、存在論的探求の対象となりうる。たとえば、ギリシャ神話に登場する、セイレンたち（舟人を誘惑する海の魔女たち）は「虚構的対象」と呼ばれる一種の抽象的対象だと考える存在論者もいる。これについては II 巻第五講義で論じる。

されうると主張する。

普遍者の存在を認めない立場、すなわち唯名論については主に第五講義の中で議論を行う。現代存在論において唯名論はいくつかのタイプに区分される。われわれは「**クラス唯名論**」、「**類似性唯名論**」、「**述語唯名論**」、「**トロープ唯名論**」という四つのタイプの唯名論を取り上げ、それらの妥当性を吟味することにしたい。

この講義が扱う「普遍者の問題」は、伝統的な存在論における諸議論との連続性をもつが、「現代存在論講義」と銘打つ以上、古い問題のたんなる焼き直しであってはならない。われわれは第四講義の後半で「今日的な実在論」の可能性もあわせて模索することにしたい。そこでは伝統的な存在論が明確に論じることのできなかった諸問題（述語と性質との対応、否定的性質、構造的普遍者、高階の普遍者など）を検討する予定である。

1.3　物とプロセス

さしあたり人や物といった個別者が存在し、さらに個別者がもつ性質や個別者のあいだに成立する関係も存在することを認めたとしよう。これらがこの教室に存在するもののすべてだろうか。

ミノル　この教室では講義が行われているわけでしょ。ということは、何だか変な言い方かもしれないけど「講義が存在する」って言えないかな？　もっと具体的に言えば、先生が何かを話したり、問いかけたり、学生がそれを聴いたり、それに答えたりする活動だけど。それ以外にも、あくびをしたり、居眠りをしたり、携帯でメールを打ったり……。

ユイ　「そうした活動が存在する」と言ってもそれほど奇妙ではないわ。でも、それらは机や椅子といった「物」とは異なるカテゴリーに属しているような気がする。

多くの存在論者たちは、それらの諸活動が「**プロセス**」と呼ばれるカテゴリーに属すると考える。むろんプロセスには人間の活動の他にも、火山の噴火やプレートの移動といった自然現象も含まれる。プロセスがいわゆる「物」とは異なるという直観は、日常的にも幅広い支持を得ているように思われる。

物もプロセスも、時空間に特定の位置をもつという意味において個別的なものであるが、それらは「時間を通じて存続（持続）する様態」の違いによって区別